

現代語いの形成

著者	宮島 達夫
雑誌名	ことばの研究
巻	3
ページ	1-50
発行年	1967-03
シリーズ	国立国語研究所論集 ; 3
URL	http://doi.org/10.15084/00001752

現代語いの形成

宮 島 達 夫

この調査は、現代語としてよく使われる単語がいつごろ現れたものかを、おもに和英辞典の見出し語によってしらべたものである。

ここでえたおもな結論は、つぎの二つである。

- (1) 明治時代は、その前後の時代よりも、語いの変化がはげしかったらしい。
- (2) ふえた単語の多くは、明治時代には漢語であり、大正・昭和時代には外来語である。

なお、これと同類の調査としては、総合雑誌の語い調査をもとにして、林大氏のしらべられたものがあるので、参照していただきたい。（「国立国語研究所年報 6」 1956）

1 調査語と調査資料

調査語としては、国立国語研究所が1956年（昭和31年）の雑誌90種を対象としておこなった語い調査でおおく出てきた1000語をとった。ただし、これは機械的に上位から1000語をとったものではなく、辞書の見出し語によって調査する必要上、見出し語になりにくいものははぶいた。具体的にいうと、語い調査で度数50以上の1220語から、つぎの220語をのぞいたものを調査語とした。

（固有名詞） 27 語

日本 アメリカ イギリス ソ連 中国 ドイツ フランス 米国

東京 大阪 京都 北海道 銀座

木村 佐藤 鈴木 高橋 田中 中村 林 山本

明治 大正 昭和 昭(昭和の略)

巨人 南海

（合成数詞） 34 語

二十 三十 四十 五十 六十 七十 八十 九十 二百 三百 四百 五百 六百

七 百 八百 九百 二千 三千 四千 五千 六千 七千 八千 九千

.0（てんれい） .2 .3 .5 .7 .8

ふたり ^{みつ}三日 ^{よつ}四日

二三

(助動詞) 6 語

れる・られる せる・させる たい よう(だ) そう(だ) みたい(だ)

(形容詞連用形派生の名詞) 2 語

多く 近く

(語構成要素) 2 語

(お)かあ(さん) (お)とう(さん)

(接頭語) 21 語

お ^ご御
一 ^{ふた}二 ^{いく}幾 第 約

大 ^{だい}大 小 ^{しょう}小 同 全 総 各 半 無 不 再 新 ^{まい}相 ^{たい}対

(接尾語) 118 語

さん さま ちゃん どの 氏 君 嬢

都 県 郡 市 区

メートル センチ センチメートル ミリ ヤール 尺 寸 トン

年 ^{ねん}年 月 ^{がつ}月 日 ^{にち}日 時 ^じ時 分 ^{ぶん}分 歳 年度 期 箇月

円 ドル

人 ^{にん}人 名 ^{めい}名 杯 ^{はい}杯 本 ^{ほん}本 枚 階 箇 条

目 ^め目 度 号 次

割 ^{わり}割 分 ^{ぶん}分 分 ^{ぶん}分 (の) パーセント

たち ら 等 ^{とう}等 ども 毎 ^{ごと}毎 ずつ あたり

的 ^{てき}的 性 ^{せい}性 風 ^{ふう}風 流 ^{りゅう}流 色 ^{しよく}色 力 ^{りよく}力 化 感

中 ^{ちゆう}中 中 ^{じゆう}中 間 ^{かん}間 内 ^{ない}内 側 ^{がわ}側 上 ^{じよう}上 後

者 ^{しゃ}者 家 ^か家 人 ^{じん}人 屋 ^い屋 生 ^{せい}生 員 ^{いん}員 士 ^し士 手 長 官

所 ^{しょ}所 部 社 室 ^{しつ}室 店 ^{てん}店 省 団 館 局 隊 校 ^{じよう}校 場 園 国 ^{こく}国 家 院 寺 庁 界

機 車 船 品 物

代 料 費 高

書 作 編 業 戦 病

権 系

らしい がる

(符号) 10 語

A B C イ ロ や(休み) +(プラス) ○ ● ♪(同じく)

こうしてえらんだ1000語は、当然基本語的なものだが、その内容は、常識

的に考える基本語いとはかなりちがう点がある。たとえば、この 1000 語の中には、

えりぐり ダーツ ゴム編 メリヤス編 まつる

などの特殊な(しかし婦人雑誌にはよく出てくる)ことばがふくまれている。

うちあわせ 見返し

も、実例は大部分が服飾用語としての使い方で、それが多いために 1000 語中にはいつてきたものである。

一方、この中には

さむい 静か やすむ 木 うそ 世間

など、だれが考えても基本的だと思われるものがいつていない。

資料としては、おもに、つぎにあげるような日本語——外国語辞典をつかった。

- 1) 日ポ辞書 1603～04(慶長 8～9)
- 2) ゴシケビッチ：和魯通言比考 1857 (安政 4)
- 3) ヘボン：和英語林集成 (初版) 1867 (慶応 4)
- 4) ヘボン：和英語林集成 (再版) 1872 (明治 5)
- 5) レーマン校定、齊田・那波・国司：和独対訳字林 1877 (明治 10)
- 6) ヘボン：和英語林集成 (3 版) 1886 (明治 19)
- 7) 高橋五郎：漢英対照 いろは辞典 1887～88 (明治 20～21)
- 8) ブリンクリー：和英大辞典 1896 (明治 29)
- 9) ルマレシャル：和仏大辞典 1904 (明治 37)
- 10) 井上十吉：新訳和英辞典 1909 (明治 42)
- 11) 武信由太郎：和英大辞典 1918 (大正 7)
- 12) 研究社新和英大辞典 1931(昭和 6)年版 (研新と略)
- 13) シ 1954(昭和 29)年版 (研大と略)

この調査の目的は、雑誌でよく使われた単語が、いつごろから使われるようになったかを知ることであって、辞書論ではない。しかし、各年代の語いを全体的に見るには、辞書の見出し語によるのが手とりばやいので、これらをつかった。そのために、本当に年代的な変化なのかどうか、うたがわしい点がでてくる

が、これはあとで問題にすることにする。

国語辞典をつかわずに、和英などにしたのは、一般に和英の方が敏感に語いの変化を反映するのではないか、という予想をたてたためである。特に明治時代については、そういえるとおもう。

ある辞書にある単語がのっているかないかの判定については、つぎのような方針をとった。

- 1) 見出し語になくても、用例にあるばあいには、あるものとした。たとえば、「愛する」「ところが」が、それぞれ単独の見出しになくても、「愛」「ところ」の用例としてあがっていれば、あるとした。家の意味の「うち」や、時間の経過をあらわす「たつ」も「内」や「立つ」の用例にあるばあいには、みとめた。
- 2) より長い見出し語の構成要素として出ているものも、あるとみとめた。単独の「ある(或)」「国際」「最高」がなくとも、「あるとき」「国際法」「最高寒暖計」があれば、これらを見とめた。ただし、これは、この長い見出し語が、語い調査で採用した β 単位として、もっと短かく切れるばあいにかぎる。「客人」「客僧」は、 β 単位としてこれ以上切れないから、これらがあっただけでは「客」という項目があっただけとはみとめない。なお、「一部始終」「優勝劣敗」だけでは、「一部」「優勝」という単語があるとはしなかった。
- 3) 見出しについている漢字には、かならずしもこだわらない。「情態」「必用」は、「状態」「必要」と同じものとみとめた。
- 4) 意味に関係のない語形のわずかなずれは無視した。「あるは」「それぞれ」「だいくわい」があれば、「あるいは」「それぞれ」「^{たいかい}大会」があるものとした。ただし、「いげ」「がくしょう」「ひぎょう」は、「^{いか}以下」「^{がくせい}学生」「^{ひこう}飛行」と区別した。

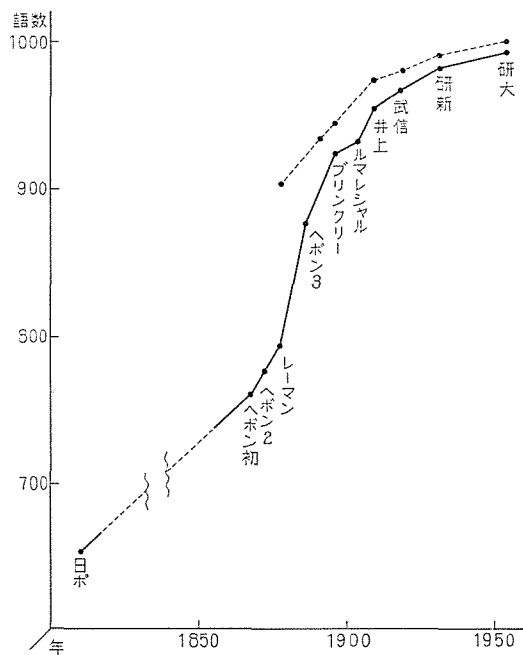
2 概 観

調査語としてえらんだ1000語が、上にあげた和英辞典にどのくらい出ているかをみると、つぎのようになる。ただし、ゴシケビッチと高橋とは、それぞれ前に出た辞書(すなわち日ポ辞書とヘボンの3版)よりも少なくなっているの、増加語数以下の欄は計算しなかった。

〔第1表〕

		増加語数	前の辞書からの年数	1年あたりの増加語数
日	ポ	654	—	—
ゴシケ	ビッチ	617	—	—
ヘ	ボン 初	761	107	0.4
ヘ	ボン 2	777	16	3.2
レ	ー マン	793	16	3.2
ヘ	ボン 3	877	84	9.3
高	橋	821	—	—
プリン	クリー	923	46	4.6
ルマレ	シャル	931	8	1.0
井	上	951	20	4.0
武	信	968	17	1.9
研	新	982	14	1.1
研	大	992	10	0.4

〔第1図〕



この図を見ると、明治時代に急カーブで上昇した語数が、大正・昭和と次第に

ゆるやかな線にかわる。ここから、

(A) 明治時代(特に前期)における語いの増加は急激だった。

という結論をくだしたくなるのは当然だ。これは、われわれの常識的な見方とも一致する。しかし、この図は、

(B) 明治時代には、辞書が急速に改善された。

という事実を示すにすぎないかもしれないし、また、

(C) このような調査法によるかぎり、いつの時代をとっても、これにちかいカーブになる。

ということかもしれない。これら三つは、おたがいに、かならずしもむじゅんするものではない。明治時代には、語いの増加も辞書の改善もさかんだったのが事実だろうが、この点について、もうすこし考えてみよう。

まず、辞書がその当時の言語を完全に反映しているといえないことは、もちろんである。以上の和英のうちで最新最大の「研究社新和英大辞典」(1954年版)でも、1000語中つぎの8語がおちている。

えりぐり 九(きゅう) ゴム編 される ダーツ まつる メリヤス編
四(よ・よん)

このうち、

えりぐり ゴム編 ダーツ まつる メリヤス編
の5語は特殊な用語であり、

される

は和英辞典として不必要かもしれない。しかし、数詞の

九 四

をおとしたことは、なんといっても手おちといわなければならない。(このミスは、武信・井上にまでさかのぼる。)

このように、当然のべき単語が不注意からおちたと思われる例は、あとでみるように高橋や井上に多いが、そのほかの辞書にも多かれ少なかれ見いだされる。特にはっきりした例は、前の辞書がすでにのせているのにおとしているばあいだ。たとえば、「設備」や「大会」は、ブリנקリー(1896)にないが、高橋(1888)にある。「技術」は、ヘボン[初](1867)にないが、ゴシケビッチ(1857)にある。これ

らは、ブリンクリーやヘボンが当然のせるべくしておいたもの、と考えれば、それらの年代の語いをおぎなうことができる。

語いをおぎなう第2の方法は、和英などとは別系統の、国語辞典などによるものである。たとえば、ヘボンや高橋にない「程度」は言海(1889~91)に、井上や武信にない「ホテル」はこれらよりも古い辞林(1907)に見いだされる。一般に、和英・和仏などは、たがいに参考にしているから、よくも悪くも先行の辞書に強く影響される。国語辞典は、これと別系統だから、相おぎないうる可能性がある。国語辞典としては、つぎの5つをとった。

- 1) 大槻文彦：言海 1889~91(明治 22 ~ 24)
- 2) 藤井・草野：帝国大辞典 1896(明治 29)
- 3) 金沢庄三郎：辞林 1907(明治 40)
- 4) 上田・松井：大日本国語辞典 1915 ~ 19(大正 4 ~ 8)
- 5) 金沢庄三郎：広辞林 1925(大正 14)

また、明治初期の新語辞典としては、当時の漢語を集めたものがあり、これによってヘボンなどをおぎなうことができる。ここでは

片岡義助：布令新聞漢語必用 文明いろは字引 1877(明治 10)

をつかった。これは、レーマンの和独辞典と同じ年に出ているものであるが、レーマンにも、またそれ以前の日ポやヘボンにもない単語がつぎのように多くみられる。

委員 一層 学生 活動 機関 危険 記者 期待 銀行 結果 結婚
決定……(〔初出語一覧表〕参照。)

これらの意味の説明は、きわめてかんたんであって、多少問題になるものもあるが、とにかく、和英や和独に見えないもの、のちにヘボンの3版やブリンクリーで拾われるものの多くがふくまれている。

最後に、これまでに行なわれた語い調査の結果を利用することができる。ここでは、国語研究所がこれまでにした、つぎの四つの語い調査でひろわれた単語と対照することにした。

- 1) 郵便報知新聞 1877年11月~78年10月(明治 10 ~ 11)
- 2) 朝日新聞 1949年6月(昭和 24)
- 3) 婦人雑誌2種 1950年1月~12月(昭和 25)

4) 総合雑誌13種 1953年7月～54年6月(昭和28～29)

(このうち、朝日新聞の調査では、数詞を意識的におとしている。)

郵便報知新聞の調査は1877年(明治10)11月から78年10月にいたる期間についてであって、これはほぼレーマンや文明いろは字引と同時期であるが、この両者に見られない、つぎのような単語をつけたすことができる。

愛情 以外 ろちあわせ 影響 会議 化学 株式 関する 完全 競争
結局……………〔初出語一覧表〕参照。)

また、「研究社和英大辞典」にもなかった「えりぐり」「ゴム編」「ダーツ」の類は、婦人雑誌の語い調査によっておぎなえる。

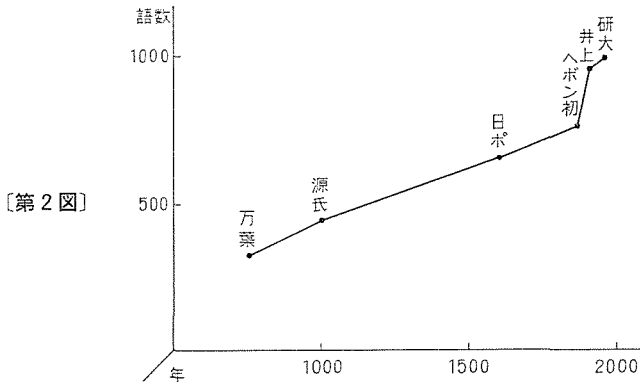
このようにしておぎなって、ある時点までの資料に何語あらわれたか、という観点で見なおすと、つぎのようになる。

〔第2表〕

	増加語数	年数	1年あたり 増加語数
1878 (郵便報知)まで	902	—	—
1891 (言海)まで	933	13	2.4
1896 (ブリックリー)まで	944	5	2.2
1909 (井上)まで	974	13	2.3
1919 (大日本)まで	980	10	0.6
1931 (研新)まで	991	12	0.9
1954 (総合雑誌)まで	1000	23	0.4

このようにして、辞典のもつ欠点がある程度「修正」したのが、第1図の点線のグラフである。このような「修正」は、かならずしも辞典の欠点を正すものとはいえない。そのためのマイナスも生じるのである。辞典に登録されたということは、すでにそれがある程度まで一般に使われている単語であると、編集者が判断したことを意味する。一方、語い調査でたまたまひろわれたものの中には、まだ当時単に存在したというにとどまって、一般に広く使われるにいたっていなかったものもまじる可能性がある。したがって、外国語辞典という等質の資料による結果に、語い調査の結果という異質の資料をつけたすことには問題が残るが、とにかく、このような修正をした上でも、やはり明治期における増加率は、大正・昭和期をかなり上まわっているのが注目される。

つぎに、このように現代に近くなるほどカーブがゆるやかになるというのは、この調査法につきまとう一般的傾向だろうか。今、日ポ辞書からさらにさかのぼって、源氏物語・万葉集のばあいをしらべてみると、源氏では446語、万葉では326語がつかわれている。〔第2図〕参照。



これで見ると、万葉からへボンの初版までは、ほとんど一直線に上昇しており、それにくらべてへボン以後90年の急上昇ぶりはいちじるしい。また、日ポ辞書が室町末期の語いをもうらしているほどには、万葉や源氏はその当時の語いをつくしていないだろうということを考えに入れると、カーブはむしろ時代をさかのぼるにつれてゆるくなるべきものではないかと思われる。とすれば、近代にはいってから、しだいにカーブがゆるくなるのは、この巨視的傾向に反する。このことを説明するためには、明治時代はその前後の時代にくらべて語いの変化のはげしい、特殊な時代だった、と考えるべきではないだろうか。

3 語 種

1,000語を語種によってわけると、

和語 584 漢語 383 外来語 17 混種語 16

である。

語種の認定上、問題になりそうなものの処置の例をあげると、つぎのようなものがある。これらは語い調査の際の処置にしたがった。

〔和語〕馬 絵 えがく 試合 ちょうど

〔漢語〕単に 特に ばか

〔混種語〕感じ けっして ひどい

語種の変化についての結論としては、

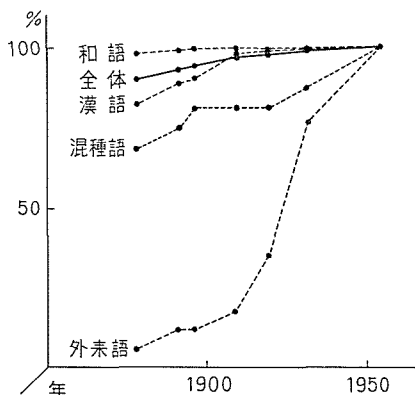
明治時代には主として漢語がふえたが、大正・昭和時代には外来語の増加がこれをおいこした。

ということができる。

今、第2表にならって、各年代までにそれぞれの語種の単語が何語あらわれているか、それは各語種の総数の何%にあたるかを示すと、第3表・第3図のようになる。()内は%。

	和語	漢語	外来語	混種語	計
1878 (郵便報知)まで	575 (98.5)	315 (82.2)	1 (5.9)	11 (68.8)	902
1891 (言海)まで	580 (99.3)	339 (88.5)	2 (11.8)	12 (75.0)	933
1896 (ブリンクリー)まで	582 (99.7)	347 (90.6)	2 (11.8)	13 (81.3)	944
1909 (井上)まで	582 (99.7)	376 (98.2)	3 (17.6)	13 (81.3)	974
1919 (大日本)まで	582 (99.7)	379 (99.0)	6 (35.3)	13 (81.3)	980
1931 (研新)まで	582 (99.7)	382 (99.7)	13 (76.5)	14 (87.5)	991
1954 (総合雑誌)まで	584 (100.0)	383 (100.0)	17 (100.0)	16 (100.0)	1000

(第3図)



これによってみても、和語はほとんど動いていないこと、外来語の増加が急激であることがわかる。

つぎに、郵便報知(明治 10~11)から言海(明治 22~24)までを明治前期、以後、井上(明治 42)までを明治後期、研究社新和英(昭和 6)までを大正、それからあとを昭和とよぶことにして、各時期における増加語数をみると、第 4 表のとおりである。

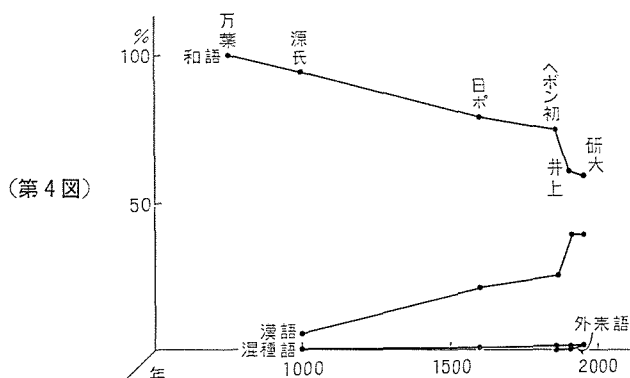
〔第 4 表〕	和 語	漢 語	外来語	混種語	計
明 治 前 期	5	24	1	1	31
明 治 後 期	2	37	1	1	41
大 正	0	6	10	1	17
昭 和	2	1	4	2	9
計	9	68	16	5	98

すなわち、漢語の増加は明治時代には圧倒的だったが、大正・昭和時代には、増加率だけでなく、増加度数でも外来語においぬかれたのである。この結論は、調査資料のえらび方に、おそらくあまり左右されていないとおもう。和英などでは、外来語を見出しとしてとらない傾向があるのではないか、とも予想したが(事実、「キング a king」程度の自明と思われる語はとらない、とことわっている例もある——研究社和英小辞典)ここで使ったような大きな和英では、その心配もあまりなさそうだ。

ただし、ここで注意しなければならないのは、この調査の基準とした現代雑誌九十種の語い調査では、長さの単位として β 単位をとっていることだ。この単位によれば 3 字以上の漢語は原則として 2 字以下に分解される。「自動 | 車」「資本 | 主義」のように。辞書の見出し語は、一般にこの β 単位に近いので、辞書による調査には便利だが、常識的にいう単語よりはみじかいことが多い。したがって、大正・昭和期に漢語の増加がにぶったといっても、それはあくまで 2 字の漢語についてであって、3 字・4 字の漢語は、明治期とおなじ程度に、あるいはそれ以上にふえているかもしれない。ただ、語構成上、2 字の漢語こそもっとも代表的な漢語だから、これのふえ方がにぶったことは、漢語全体の変化を代表するものとみてよいだろう。

なお、第 4 図に、古くからの各資料における語種の割合の変化を示した。ヘボ

ンのところで急に折れて、漢語が急増している点に注意していただきたい。



4 品詞・意味分野

この 1000 語を品詞別，意味分野別に分類すると， つぎのようになる。意味の分類は林大氏のものによる。

	和 語	漢 語	外来語	混種語	計
1) 名 詞	214	343	17	7	581
11) 抽 象 的 関 係	89	111	2	1	203
12) 人 間 活 動 の 主 体	38	58	4	1	101
13) 人 間 活 動	30	151	2	5	188
14) 生 産 物 ・ 用 具 物 品	18	9	8	—	35
15) 自 然 物 ・ 自 然 現 象	39	14	1	—	54
2) 動 詞	217	—	—	7	224
21) 抽 象 的 関 係	116	—	—	4	120
23) 精 神 ・ 行 為	96	—	—	3	99
25) 自 然 現 象	5	—	—	—	5
3) 形 容 詞 ・ 副 詞	122	39	—	2	163
31) 抽 象 的 関 係	96	34	—	2	132
33) 精 神 ・ 行 為	15	4	—	—	19
35) 自 然 現 象	11	1	—	—	12

4) そ の 他	31	1	—	—	32
41) 接 続 詞 類	15	—	—	—	15
43) 陳述副詞・感動詞類	16	1	—	—	17
計	584	383	17	16	1000

3)のところを普通の品詞分類になおすと、つぎのとおり。

	和 語	漢 語	混種語	計
形 容 詞	49	—	1	50
形 容 動 詞	6	27	—	33
副 詞	48	12	1	61
連 体 詞	13	—	—	13
名 詞	5	—	—	5
助 動 詞	1	—	—	1

ただし、

十分 大変 特別 普通 わずか

のように、副詞としても形容動詞としてももちいられるものは形容動詞に、

いかに(いかなる) 大いに(大いなる) 単に(単なる)

は副詞に入れた。

上の表でみると、漢語は、11)抽象的關係 13)人間活動 に、外来語は、14)生産物・用具物品 に多い。いいかえれば、漢語は抽象名詞に、外来語は具体名詞に多い、ということになる。そして、漢語の増加が明治時代に、外来語の方は大正以後に多いことを考えると、これは、古くは抽象名詞、新しくは具体名詞がふえつつある、という傾向を示すものといえるかもしれない。

これはおもしろい事実だが、今度の調査だけでは、そういう結論をだすのは、まだ早すぎるとおもわれる。その一つの理由は、この調査で、漢語を2字以下に分解するβ単位をとっていることだ。「自動一車」「飛行一機」など、全体としては具体名詞であって、β単位に分解すると抽象名詞+接尾語になってしまうものが、漢語にはかなりある。それで、β単位以外の、もっと長い単位を基準にしたらどうなるかということもしらべなければ、漢語——抽象名詞、外来語——具体名詞という図式をみちびくのは危険かもしれない。もう一つの問題は、1000語をえらぶ基準にした語い調査の対象の性質である。雑誌のなかでもっとも外来語のお

おいのは婦人雑誌だが，記事の性質上，婦人雑誌は他の種類の雑誌にくらべて具体名詞の外来語がおおく出てくると思われ，あるいはこれがここでとった調査語中の外来語に具体名詞のおおい原因になっているかもしれない。

さて，いくつかの資料について，品詞・意味分野別の語数をみると，つぎのようになっている。

	万	葉	源	氏	日	ポ	へボン (初)	井	上	計
1) 名 詞	127	174	302	370	539	581				
11) 抽 象 的 関 係	61	79	130	145	194	203				
12) 人 間 活 動 の 主 体	15	31	51	68	88	101				
13) 人 間 活 動	13	21	57	86	177	188				
14) 生 産 物 ・ 用 具 物 品	10	13	20	21	27	35				
15) 自 然 物 ・ 自 然 現 象	28	30	44	50	53	54				
2) 動 詞	136	176	208	219	218	224				
21) 抽 象 的 関 係	77	100	114	117	117	120				
23) 精 神 ・ 行 為	55	71	89	97	96	99				
25) 自 然 現 象	4	5	5	5	5	5				
3) 形 容 詞 ・ 副 詞	59	87	120	142	163	163				
31) 抽 象 的 関 係	45	68	93	112	132	132				
33) 精 神 ・ 行 為	9	11	17	18	19	19				
35) 自 然 現 象	5	8	10	12	12	12				
4) そ の 他	4	9	24	30	31	32				
41) 接 続 詞 類	1	3	11	13	14	15				
43) 陳 述 副 詞 ・ 感 動 詞 類	3	6	13	17	17	17				
計	326	446	654	761	951	1000				

また，3)の部分をつつうの品詞になおすと，つぎのようになる。

	万	葉	源	氏	日	ポ	へボン (初)	井	上	計
形 容 詞	33	41	48	50	50	50				
形 容 動 詞	1	6	18	23	33	33				
副 詞	17	29	39	50	61	61				
連 体 詞	5	7	9	13	13	13				
名 詞	2	3	5	5	5	5				
助 動 詞	1	1	1	1	1	1				

以上の表から、つぎのようなことがいえる。

- (1) 品詞別にみると、増加率のいちじるしいのは、名詞・形容動詞および第4の類(接続詞・感動詞など)であり、あまりふえていないのは動詞・形容詞である。これは、ほぼ、名詞・形容動詞に漢語が多いという事実と対応する。ただし、第4の類の増加率は、これでは説明できない。
- (2) 名詞の分野のなかで、もっとも増加率のたかいのは、13) 人間活動であり、これは動詞の増加率のひくさをおぎなっている。すなわち、ここに属するのは、動作性の抽象名詞(大体は漢語)がおおく、「～する」をつければ動詞としてはたらくものである。
- (3) 第1～第3の各分野を通じて、自然物・自然現象の分野では増加率がひくい。

5 辞典の比較

ここでは、1000語が見出し語にどの程度とられているか、という観点から、国語辞典と和英辞典との比較をすることにする。

- (1) ヘボン「和英語林集成(第3版)」1886(明治19)

高橋五郎「漢英対照 いろは辞典」1887～88(明治20～21)

大概文彦「言海」1889～91(明治22～24)

ヘボンの3版が再版にくらべてひじょうに多くの単語をおぎなっていることは、よく知られており、今回の調査でもそれがわかる。ヘボンの再版と3版とのあいだには、残念ながら目ぼしい和英辞典はなく、レーマンの和独はヘボンの再版よりもかなりの語数をましているが、これとくらべてもヘボン3版の増加語数は飛躍的である。しかし、このことからただちに10年代に語いが増加したとすることが危険なことは、上に文明いろは字引や郵便報知から実例をあげたとおりだ。レーマンになくてヘボン3版にある見出し語は86語で、ひじょうに多いが、このうち55語はレーマンと同年の郵便報知にすでに出ている。したがって、10年代における急激な変化が、語いの上のものか辞書の中にとどまるものかは、今後一層くわしい調査にまたなければならない。

高橋のいろは辞典は、ひじょうに特色のある辞典だ。一般に、あとで出る辞典

は、前の辞典の見出し語をそのまま含んでこれに増補していくのであり、ヘボン初→ヘボン2→レーマン→ヘボン3→ブリンクリーという系列では、このことがはっきりみとめられる。ところが、高橋はこの系列に属しておらず、直前に出たヘボン3版の見出し語と無関係である。すなわち、ヘボン3版にない30語をふくんでいる一方、ヘボンにある86語をおとしている。

	和語	漢語	外来語	混種語	計
ヘボンだけにあるもの	57	26	1	2	86
高橋だけにあるもの	4	26	0	0	30

高橋に和語が少ないのが目立つが、これは

あんな おぼえる きめる 死ぬ たのしい できる どの ねがう のこ
す はじまる まったく 三つ みえる もっと もどる わかる わたし
のような、いちばん基本的とおもわれる多くの単語がおちているためで、この点からみると、高橋はきわめて不完全だといえる。

漢語についても、高橋は、

氣 逆 急 七 食事 番
など、わりに日常語的なものをおとし、一方ではヘボンにない

影響 技術 需要 態度 発表 文化 労働
など、文章語的なものをひろっている。そのうちでも、

技術 設備 大会

の3語は、あとのブリンクリーにもないものだ。このような点からみて、「(近時著述ノ和英字書ノ如キハ)現今専ラ流行スル所ノ漢語ヲ蒐集スル極メテ少クシテ実用ニ疎キノ憾多シ」という編者の意見は、実際にこの辞典の見出し語選定方針に反映しているといつてよい。

高橋五郎は、ヘボンの3版を出すにあたって特に協力した人として、その序文にもことわってある人である。その高橋がすぐあとで出した辞典だから、ヘボンと似ていてもよさそうなものなのに、こうもくいちがっているのは、意外な気がする。しかし、この「いろは辞典」は、材料収集排列などは、漢学の力のある横地正邦・渡辺精次郎など数人にあたらせたとよだから、見出し語については高橋個人の責任はあまりないのかもしれない。

つぎに、ヘボン3版と言海との差について。予想としては、ヘボンの方がよく当時の漢語をひろっているだろう、言海は和語に重点をおいているだろう、と考えたが、これははずれてしまった。

	和 語	漢 語	外来語	混種語	計
ヘボンだけにあるもの	19	19	1	0	39
言海だけにあるもの	7	19	0	3	29

和語がヘボンの方に多いのは、言海でつぎのような口語的要素をとおしているためである。

いけない いらっしゃる こんな そんな なさる まあ まるで
もっと われわれ

漢語については、ヘボンも言海も同程度であり、ひろわれているものの性質のちがいが、ヘボン対高橋のばあいとちがって感じられない。

(2) 藤井・草野 「帝国大辞典」 1896(明治 29)

ブリנקリー 「和英大辞典」 1896(明治 29)

同年に出たこの二つの辞典では、和英の方が和語・漢語ともかなり多い。

	和 語	漢 語	外来語	混種語	計
帝国だけにあるもの	2	7	0	3	12
ブリנקリーだけにあるもの	15	28	1	0	44

国語辞典の方は、言海のばあいと同じく、

いけない いらっしゃる そして でかける もう もっと
などの口語的要素がすくないようだ。

(3) 金沢庄三郎 「辞林」 1907(明治 40)

井上十吉 「新訳和英辞典」 1909(明治 42)

ここになると、国語辞典が和英辞典をおいぬいている。つまり、辞林の方が見出し語のぬけおちが少ない。

	和 語	漢 語	外来語	混種語	計
辞林だけにあるもの	13	6	1	0	20
井上だけにあるもの	5	4	0	0	9

井上も、その序文で、これまでの和英辞典が普通の日本語をおとしていることを指摘し、できるだけ多くの語いを集めるのに努力したといっている。たしかに、

和英辞典だけの系列をみていると、

意識 印象 解決 可能 傾向 個人 作家 出演……………

と、井上になってはじめてひろわれた漢語がかなりある。しかし、これらは、すでに辞林によって採用されているものであって、国語辞典まで考慮に入れば、井上の手柄にすることはできない。

しかも、一方、井上は基本的な和語のいくつかをおとしている。

お前 折る 居る^{ゐる} そして はじめる 三つ 四^よ わたし われわれ
など。漢語をよくひろって、基本的な和語に手おちがある点で、井上はちょっと高橋に似たところがある。これらの単語は、ブリנקリーには出ていたものだから、和英辞典の系統はブリנקリーと井上とのあいだにやや断層があることを感じさせる。そして、井上にはじまる手おちのいくつか、たとえば、数詞の

四(よ、よん) 九(きゅう)

というよみの脱落は、以後の武信や研究社大和英にうけつがれて、現代にいたっている。

このあとの、武信と大日本国語などについても、それぞれ見出しに出入りがあるが、1,000語の範囲ではすでに大部分があらわれてしまっているので、比較しても、あまりはっきりした特色は出てこない。

〔初出語一覧表〕

日ボ辞書・和魯通言比考およびヘボン初版にない単語で、はじめて現れるものの表

レーマンと文明いろは字引、ブリנקリーと帝国大辞典、武信と大日本国語は、出た時期がほとんど同じなので、初出の単語も重複して出し*をつけた。

ヘボン「和英語林集成」(再版) 1872(明治5)

一般 会社 監督 教育 研究 される 事務 生活 繊維 組織 注意 ばあい
比較 法律

レーマン校定「和独対訳字林」 1877(明治10)

外国 希望* 警察* 原因* 健康* 幸福* 時間* 資本* 社長 状態* 制度*
地方* 努力* 批評 部分* 報告*

片岡義助「文明いろは字引」 1877(明治 10)

委員 一層 学生 活動 機関 危険 記者 期待 希望* 銀行 警察* 結果
結婚 決定 原因* 健康* 建設 幸福* 時間* 事業 資金 事件 実際 資本*
手術 主張 準備 使用 条件 状態* 将来 制度* 青年 選挙 存在 地方*
調査 特別 努力* 発見 表面 部分* 編集 報告* 方法 方面 量 労働

郵便報知新聞 1877~78(明治 10~11)

愛情 以外 うちあわせ 影響 会議 化学 株式 関する 完全 競争 結局
行為 工業 今後 際 最後 最高 撮影 雑誌 時期 自信 自動 社会 主義
需要 消費 白 政策 成績 製品 責任 説明 線 戦後 全国 増加 卒業
大会 大体 単に 中心 直接・程度 でかける 読者 特に 人気 販売 方針
保険 問題 要求 要する(源氏に「要ず」) 予定 理由

ヘボン「和英語林集成」(3版) 1886(明治 19)

科学 簡単 計画 原子 工場 材料 女性 絶対 代表 男性 電話 ところが
ページ 見返し もっと よく 予想

高橋五郎「漢英対照いろは辞典」 1887~88(明治 20~21)

安定 一部 興味 交渉 国際 参照 指導 趣味 設備 態度 発表 文化

大槻文彦「言海」 1889~91(明治 22~24)

感じ 身頃

藤井・草野「帝国大辞典」 1896(明治 29)

気もち きりかえ* 現実 行動 むいしろ

ブリンクリーほか「和英大辞典」 1896(明治 29)

家庭 完成 企業 きりかえ* 効果 重要 率

ルマレシャル「和仏大辞典」 1904(明治 37)

共産 向上 最近 全然 内容

金沢庄三郎「辞林」 1907(明治 40)

意識 印象 解決 可能 傾向 現代 原料 個人 作品 作家 週間 出演 女優
性格 選手 増資 発展 飛行 表現 表情 ホテル 野球 恋愛

井上十吉「新訳和英辞典」 1909(明治 42)

投資 優勝

武信由太郎「和英大辞典」 1918(大正 7)

航空 チーム 投手* ポケット* 魅力

上田・松井「大日本国語辞典」 1915~19(大正 4~8)

カメラ 投手* ポケット*

金沢庄三郎「広辞林」 1925(大正 14)

スカート スター デザイン ファン 放送 ラジオ

武信由太郎 「研究社新和英大辞典」 1931 (昭和6)

映画 彼女 スポーツ バス 本誌

婦人雑誌2種 1950 (昭和25)

ウエスト えりぐり 高校 ゴム編 ダーツ ブラウス まつる メリヤス編

総合雑誌13種 1953～54 (昭和28～29)

テレビ

この調査では、原則として初版(第1刷)の辞典を使うことにした。ただし、「帝国大辞典」は再版(初版と同年同月)、「広辞林」は43版(1928年)であり、「大日本国語辞典」は部分的に初版から7版までまじっている。

ご教示をいただいた森田武氏、辞典類を見せていただいた三省堂編修所にお礼を申しあげたい。

	(計)	(584)	%	(383)	%	和 語	漢 語	外 來 語	混 種 語	計
		(584)	%	(383)	%			(17)	(16)	(1000)
万：万葉集		326	100.0	—	0.0			—	0.0	326
源：源氏物語		420	94.2	23	5.2			—	0.0	446
p：日ボ辞書 1603～04(慶長8～9)		515	78.7	134	20.5			—	0.0	654
r：ゴシケビッチ「和魯通言比考」1857(安政4)		501	81.2	116	18.8			—	0.0	617
1：へボン「和英語林集成」(初版) 1867(慶応4)		562	73.9	190	25.0			1	0.1	761
2：へボン「和英語林集成」(再版) 1872(明治5)		564	72.6	204	26.3			1	0.1	777
d：レーマン校定、斉田・那波・国司「和独対訳字林」1877(明治10)		565	71.2	220	27.8			1	0.1	793
郵：郵便報知新聞 1877～78(明治10～11)		531	63.9	288	34.7			1	0.1	831
3：へボン「和英語林集成」(3版) 1886(明治19)		569	64.9	297	33.9			2	0.2	877
G：高橋五郎「漢英対照いろは辞典」1887～88(明治20～21)		517	63.0	296	36.1			1	0.1	821
言：大槻文彦「言海」1889～91(明治22～24)		557	64.2	297	34.3			1	0.1	867
帝：藤井・草野「帝國大辞典」1896(明治29)		556	62.3	322	36.1			1	0.1	892
B：プリンクラーほか「和英大辞典」1896(明治29)		578	62.6	333	36.1			2	0.2	923
f：ルマレシヤル「和仏大辞典」1904(明治37)		579	62.2	339	36.4			2	0.2	931
辞：金沢庄三郎「辞林」1907(明治40)		576	59.9	370	38.5			3	0.3	962
I：井上十吉「新訳和英辞典」1909(明治42)		567	59.6	368	38.7			3	0.3	951
T：武信由太郎「和英大辞典」1918(大正7)		574	59.3	377	38.9			4	0.4	968
大：上田・松井「大日本國語辞典」1915～19(大正4～8)		579	59.5	376	38.6			5	0.5	973
広：金沢庄三郎「広辞林」1925(大正14)		576	59.2	374	38.4			10	1.0	973
K：武信由太郎「研究社新和英大辞典」1931(昭和6)		576	58.7	380	38.7			12	1.2	982
朝：朝日新聞1カ月分 1949(昭和24)		572	59.8	362	37.8			9	0.9	957
婦：婦人雜誌2種 1950(昭和25)		580	58.7	376	38.1			16	1.6	988
総：綜合雜誌13種 1953～54(昭和28～29)		579	58.7	380	38.5			14	1.4	987
e：勝泉録吉郎「研究社新和英大辞典」1954(昭和29)		580	58.5	382	38.5			16	1.6	992

%は各資料ごとの語種の比率

(文：片岡義助「文明いろは字引」1877[明治10])

ॐ
 नमो भगवते वासुदेवाय
 नमो भगवते वासुदेवाय

な編れろす
せゝ ろ
うんうんうん

後度な目
今今こ今座

お 近後高
九察最最最

初判料がす
最裁材と先

年品
昨作酒

かる影家誌
す也
九九撮作雑

¹ ほかにの意味。

「草独見出しなし」このほか」など。

。2.77[例]の「こ」

1「最期」はある。

。この「世襲家屋敷」で、

1 きりもりの意味。

他動詞だけ。

۲۷۲۸۸۸
 ۵۵۸۸
 ۸۸۸۸۸۸۸۸

業照
產參四死

合
試塩* しかしも
時

則業金件
式時專資事

と実身信然
し事自自自

第代が
下次時した

尖尖指自
際剪動

「まったくの意味。」

潮は別。
1「しかしながら」。

「機会の意味の「時機」「事機」はある。

— りんしの意味。

＊ 動詞の「したかう」は別。

「いち」はある。

「～する」の形で。

し
知
白
白

べ
れ
れ
い

神
信
心
新

経
ず
配
聞

図
ず
数

い
ふ
ん

カ
ー
ト

好
す
す
す

き
ぎ
く
な

い
し
な
し

す
す
す
す

じ
む
そ
ー

タ
ッ
カ

ず
つ
と
る

て
で
に

な
わ
て

ス
ボ
ー

住
む
む

わ
る
(ぬ)

す
わ
る

1 弾く意味。

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

総
婦
朝
K
広
大
T
I
辞
f
B
帝
言
G
3
郵
—
d
2
1

1 newspaper の誤は G から。

1 「ナ」。

1 「ずい」と同義。

1 まったくの意味。

ひじょうにの意味。

[illegible]

典	中調	心在子とど
p	r	源
d	i	
文	文	
郵	郵	
3	3	
G	G	
言	言	
帝	帝	
B	B	
f	f	
辞	辞	
I	I	
T	T	
大	大	
広	広	
K	K	
朝	朝	
婦	婦	
総	総	
e	e	

とて
つに
ちい
あつ
の就
にす
通ず

一	万	源	p	r	1	2	d	—	郵	3	G	三	帝	B	f	辞	I	T	大	広	K	朝	婦	総
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

八世の志味は

[illegible][illegible]

總公司

[illegible]

- 「人間界」の形で。
- 「ぬい」の川例として。
- 「いぬ」
- 「〜に臨む」は別。

